

今回の登録美術品について

1 所有者：

下記①, ②：個人

下記③：個人

2 登録日：平成30年6月12日

3 公開美術館（予定）：

下記①：千葉市美術館（千葉市中央区）

下記②：東京国立近代美術館（東京都千代田区）

下記③：東京国立博物館（東京都台東区）

※公開のスケジュールは各館において決定されます。

4 登録美術品の概要：

	登録番号	美術品の名称	種類	制作時期	員数	備考
①	78	しほんたんさいふうう と こうず たのむら 紙本淡彩風雨渡江図 〈田能村 ちくでんひつ きちゅうのねんきあり 竹田筆／己丑ノ年記アリ〉	絵画	江戸時代 (19世紀)	1幅	重要美術品認定 (昭和11年9月12日)
②	79	かぜしょうしょうとしてえきすいさむし 風蕭々兮易水寒	絵画	昭和時代 (20世紀)	1幅	—
③	80	みんしんしよ が せんめんしゅう 明清書画扇面集	複合資料	明～清時代(15 ～19世紀)	843面	一部重要美術品認定 (昭和10年12月13日)

【登録番号78】

作品名：紙本淡彩風雨渡江図しほんたんさいふううとこうず〈田能村竹田筆たのむらちくでんひつ／己丑ノ年記アリきちゆうねんき〉

員数：1幅

法量・形状等：紙本淡彩，掛幅装かけふくそう，寸法：177.0×37.1cm

制作時期：江戸時代(19世紀)・文政12年(1829)

制作者：田能村竹田（1777—1835）

説明：

本作は、江戸時代後期の文人画家・田能村竹田の手になる作品である。

縦に細長い画面に、近景に風雨に揺れる樹木と川岸の人家，川を挟んで彼岸の遠景に岩山と山閣を配し，中景の波立つ川には，激しい風雨の中渡り来る小舟を一艘描く。小舟には傘みのや蓑で風雨を必死にしのぐ人物が描かれ，近景の家屋内には，小舟の方を見やる人物と，眠るような姿の人物が描かれる。建物や人物には淡彩が施され，濃淡の墨色が引き立てられている。画面上半部には岩山から吹き降ろす風雨や霧を表現するのか，帯状に白く塗り残された筋がある。

画面上部には，竹田による自題じだいが施されており，「南豊 田憲なんぽう でんけん」と署名する。自題中に「今茲己丑初秋，在大阪府」とあるように，本作は文政12年(1829)53歳の年に，大坂滞在中に制作されたことがわかる。

竹田の門人帆足杏雨ほあしきょううが編さんした『自画題語』後編一に収載の「風雨渡江図」の題語は，本図のものと若干の異同があるが，これによれば，本図は竹田と親交のあった医師松本酔古まつもとすいこのために描いたものとされる。

竹田は晩年に繊細で味わい深い優品を多く残しているが，本作も竹田円熟期の作品であり，風雨にさらされる木々や山肌，小舟の動感に富んだ描写や，人物や川面の素朴な描写の味わいには見るべきものがある。本作は，重要美術品にも認定されており，田能村竹田の画技の水準を示す基準作として，重要な作品といえる。

(写真)



【登録番号79】

作品名： 風蕭々兮易水寒^{かぜしやうしやうとしてえきすいさむし}

員数：1幅

法量・形状等： 絹本墨画^{けんぽんぼく が} 掛幅装^{かけふくそう} 寸法：64.8×87.0cm

制作時期：昭和時代(20世紀)・昭和30年(1955)

制作者：横山大観^{よこやまたいかん} (1868—1958)

説明：

明治期の近代日本画草創期から戦前戦後を通じて日本美術界を牽引した画家横山大観^{けんいん}の作品である。大観はその生涯を通して多くの名作を残したが、本作は、昭和30年(1955)、大観87歳の作品である。

本作の画題「風蕭々兮易水寒」は、司馬遷^{しばせん}の『史記』^{しき}中の詩による。中国の戦国時代、燕^{えん}の太子丹^{たん}から秦王(のちの始皇帝)暗殺の密命を受けた荊軻^{しん}が、国境の川易水^{けいすい}のほとりで、見送りの人々と別れる際に、死を覚悟して詩を詠んだ。その詩「風蕭々兮易水寒^{かぜしやうしやうとしてえきすいさむし} 壯士一去不復環^{そ う し ひとたびさりとまたかえらず}」の一節をとる。

本作は、易水のほとりにたたずみ川向こうを見つめる一匹の犬と、独特な枝ぶりの柳を配し、その向こうにもやの立ち込める易水の川面^{かわも}を描く。胸を張り、足を踏ん張って立つ犬は、大観が所有した青銅製の犬の置物をモデルとしたのではないと言われる。独特の水墨技法が駆使された作品で、犬の眼には金泥が施され、画面右下には「大観」の落款と白文方印^{はくぶんほういん}が据えられている。全体に寂寥感^{せきりよう}が濃く、最晩年の大観の境地が反映されたものと思われる。

本作と同様の図様のものが他に数点確認されるが、本作は中でも優れた出来栄えのものであり、昭和30年の再興第40回日本美術院展覧会に出品されている。大観は亡くなる前年まで制作を続けたが、本作は結果として最後の院展出品作品となった。

本作は、大観の代表作の一つで、大観の事績をたどる上で欠かせない作品であり、学術的価値は高い。

(写真)



【登録番号80】

作品名： 明清書画扇面集

員数： 843面

法量・形状等： 16.4×50.3 cmほか、金箋墨書、紙本淡彩ほか

制作時期： 明～清時代（15～19世紀）

制作者： 惲寿平ほか

説明：

中国・明～清時代の書画名家の扇面形式によるコレクションで、中国近代の書画コレクションとして知られる小萬柳堂旧蔵品である。

もとは、中国泰州の人・宮本昂（字は子行）・昱（字は玉甫）兄弟が収集したものである。兄本昂は山東知県を、弟昱は直隸知県を務めた人物であるが、50年にわたる官遊の間任地において収集に努め、明～清時代の800余人の書画家の扇面を『書画扇存』6集、1053面という形でまとめた。これらの作品は、本昂の遺言により親戚であった廉泉（1863-1932）に譲渡された。

廉泉は江蘇無錫の人であり、清末に上海で教育事業や出版事業に携わった。また詩人や書画収集家としても知られる。小萬柳堂コレクションは、廉泉とその妻・呉芝瑛（1868-1933ないし1870-1937）とともに築かれたもので、呉芝瑛もまた、詩人や書家として知られ、慈善事業や婦女教育にも尽くしている。

廉泉は、大正時代に数回にわたり来日しているが、その際、自らのコレクションを持参し、東京大正博覧会や東京美術学校の展示会、神戸の南湖扇面美術館等でその一部を展観に供したり、図録や『扇面大観』等の選集の出版を行ったりしている。また、滞在中にコレクションの一部を売却しており、本扇面集も譲渡の交渉を大村西崖に託していることが知られる。

本作は、もとの『書画扇存』1053面のうち、210面が失われ、843面（書361面、画482面）からなる。初集から6集の各集が本集（上下）と別集（上下）の計24集にまとめられている。扇面は、それぞれ2つ折りの台紙の片面に貼り付けられ、本集は漆塗りの夾板で挟み、別集は紙帙でまとめる。宮兄弟の意になかった作品については、台紙に「宮子行同弟玉甫寶之」「宮子行玉甫共欣賞」の印が捺されている。

惲寿平や王鑑・呉歷等、明から清時代の書画家を伝称筆者とする作品が幅広くそろう、惲寿平の作品68面については、重要美術品に認定されている。当時好まれた明清の書画家の形式や書風・画風を伝え、明清の書画史を通覧する資料として、資料価値がある。また、コレクションの来歴も明らかであり、これだけ大量の扇面書画がまとまって伝存する価値は高く、公開され研究に供されることは意義がある。

(写真)

